

第五章 調査対象者の抱く街並みの景観イメージ構造

5-1 景観イメージに関するアンケート結果

実験対象地域の景観イメージを明らかにするために、街路景観イメージに関するアンケート項目¹⁾への回答結果を単純集計する。データは「4-1-2 調査対象者のサンプリング」で説明を行った、景観イメージの分析対象としたアンケート(参画者 58 枚、不参画者 32 枚、計 90 枚)を用いた。

各形容詞対の評定平均値、標準偏差の算出を行った。評定平均値と標準偏差を表 5-1 に示す。

同時に、各形容詞対間の関係性を明らかにするために、相関係数の算出を行った。相関係数は Spearman の相関係数を計算した。形容詞対間における相関係数を表 5-2 に示す。

表 5-1 形容詞対の評定平均値と標準偏差

	参画者				不参画者				全体			
	事前		事後		事前		事後		事前		事後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
身近な—疎遠な	0.83	1.34	1.10	1.18	1.00	1.17	1.38	1.27	0.89	1.29	1.20	1.22
華やかな—質素な	-1.00	0.83	0.31	1.46	-0.50	1.27	-0.06	1.09	-0.82	1.04	0.18	1.35
新しい—古い	-1.21	0.85	-0.28	1.36	-1.50	0.79	-0.56	1.37	-1.31	0.84	-0.38	1.37
趣のある—殺風景な	-0.41	1.22	0.55	1.33	-0.31	1.04	0.69	1.16	-0.38	1.16	0.60	1.27
単調な—複雑な	0.55	1.10	-0.14	1.11	-0.13	1.11	0.25	0.66	0.31	1.15	0.00	0.99
活気のない—活気のある	1.34	1.15	-0.03	1.56	0.81	1.24	0.13	1.05	1.16	1.21	0.02	1.41
落ち着かない—落ち着く	-0.83	0.99	-0.38	1.13	-0.75	1.25	-0.94	0.97	-0.80	1.09	-0.58	1.11
地味な—派手な	1.34	0.88	0.00	1.39	1.13	1.05	0.63	1.11	1.27	0.95	0.22	1.33
連なった—バラバラな	-0.17	1.37	0.24	1.30	0.31	1.49	0.25	0.90	0.00	1.43	0.24	1.18
明るい—暗い	-0.83	1.08	0.45	1.38	-0.31	0.85	0.00	0.94	-0.64	1.04	0.29	1.26
騒がしい—静かな	-0.34	1.37	0.07	1.23	-0.88	0.70	-0.88	0.86	-0.53	1.20	-0.27	1.20
冷たい—暖かい	-0.48	0.86	-0.86	1.14	-0.94	1.14	-1.19	0.81	-0.64	0.99	-0.98	1.04
安らいだ—緊張した	0.72	1.01	0.31	1.18	1.06	1.03	0.94	1.03	0.84	1.03	0.53	1.17
開放的な—閉鎖的な	-0.86	1.20	0.24	1.48	-0.44	1.06	-0.06	1.09	-0.71	1.17	0.13	1.36
進歩的な—伝統的な	-0.86	1.04	0.03	1.25	-1.06	1.20	-1.31	0.92	-0.93	1.10	-0.44	1.31
乱雑な—整った	0.14	0.86	-0.34	0.71	0.06	0.66	0.00	0.61	0.11	0.80	-0.22	0.70
一般的—特徴的な	0.14	1.25	-0.48	0.93	-0.31	0.77	-0.25	0.97	-0.02	1.13	-0.40	0.95
好きな—嫌いな	0.69	0.83	0.59	1.10	0.75	0.97	1.13	1.11	0.71	0.88	0.78	1.13
親しみにくい—親しみやすい	-0.59	1.10	-0.41	1.07	-0.56	1.41	-0.75	1.20	-0.58	1.22	-0.53	1.13
にぎやかな—さびしい	-0.83	0.87	0.55	1.45	-0.56	0.70	-0.38	0.78	-0.73	0.83	0.22	1.33

表 5-2 各形容詞対間における相関係数

	身近な—疎遠な	華やかな—質素な	新しい—古い	趣のある—殺風景な	単調な—複雑な	活気のない—活気のある	落ち着かない—落ち着く	地味な—派手な	連なった—バラバラな	明るい—暗い	騒がしい—静かな	冷たい—暖かい	安らいだ—緊張した	開放的な—閉鎖的な	進歩的な—伝統的な	乱雑な—整った	一般的な—特徴的な	好きな—嫌いな	親しみにくい—親しみやすい	にぎやかな—さびしい
身近な—疎遠な	1.00																			
華やかな—質素な	0.10	1.00																		
新しい—古い	0.04	0.45	1.00																	
趣のある—殺風景な	0.23	0.44	0.45	1.00																
単調な—複雑な	0.09	-0.28	-0.20	-0.27	1.00															
活気のない—活気のある	-0.04	-0.46	-0.42	-0.52	0.33	1.00														
落ち着かない—落ち着く	-0.30	0.39	0.24	0.02	-0.20	-0.24	1.00													
地味な—派手な	0.02	-0.51	-0.49	-0.47	0.30	0.70	-0.44	1.00												
連なった—バラバラな	0.24	0.10	-0.01	0.35	-0.20	-0.22	-0.13	-0.17	1.00											
明るい—暗い	0.17	0.44	0.45	0.65	-0.28	-0.57	0.17	-0.60	0.37	1.00										
騒がしい—静かな	-0.24	0.25	0.18	0.10	-0.20	-0.18	0.35	-0.22	-0.12	0.22	1.00									
冷たい—暖かい	-0.36	-0.14	-0.21	-0.47	0.15	0.27	0.33	0.19	-0.48	-0.44	0.21	1.00								
安らいだ—緊張した	0.32	-0.33	-0.31	-0.08	0.17	0.24	-0.56	0.42	0.17	-0.18	-0.43	-0.24	1.00							
開放的な—閉鎖的な	0.17	0.47	0.44	0.58	-0.23	-0.59	0.12	-0.56	0.23	0.57	0.11	-0.36	-0.16	1.00						
進歩的な—伝統的な	-0.12	0.36	0.37	0.20	-0.23	-0.24	0.47	-0.43	-0.14	0.27	0.31	0.11	-0.52	0.32	1.00					
乱雑な—整った	-0.20	-0.21	-0.09	-0.25	0.19	0.33	0.02	0.31	-0.39	-0.28	0.09	0.26	-0.01	-0.21	-0.08	1.00				
一般的な—特徴的な	-0.13	-0.17	-0.05	-0.28	0.30	0.33	0.05	0.27	-0.42	-0.32	-0.09	0.33	0.03	-0.30	-0.01	0.33	1.00			
好きな—嫌いな	0.40	0.04	0.07	0.39	0.00	-0.21	-0.32	-0.07	0.39	0.33	-0.10	-0.52	0.25	0.29	-0.21	-0.22	-0.32	1.00		
親しみにくい—親しみやすい	-0.38	0.08	-0.01	-0.21	0.03	0.02	0.35	-0.07	-0.34	-0.21	0.19	0.45	-0.32	-0.17	0.19	0.18	0.27	-0.46	1.00	
にぎやかな—さびしい	0.05	0.48	0.36	0.42	-0.45	-0.48	0.25	-0.56	0.14	0.48	0.28	-0.24	-0.24	0.52	0.42	-0.25	-0.30	0.13	-0.03	1.00

網掛けの数値：相関係数の絶対値が 0.50 以上の数値

Spearman の相関係数を算出した結果、高い相関係数(相関係数 $r \geq 0.50$)を記録した、形容詞対の組み合わせは 15 通りであった。

特に、各形容詞対との強い相関が見られた形容詞対は、「活気のない—活気のある」、「地味な—派手な」、「明るい—暗い」、「開放的な—閉鎖的な」の 4 組の形容詞対であった。「地味な—派手な」、「開放的な—閉鎖的な」の 2 組の形容詞対は、5 組の形容詞対への相関が強く、「活気のない—活気のある」、「明るい—暗い」の 2 組の形容詞対は、4 組の形容詞対への相関が強いことがわかった。

これら 4 組の形容詞対は、多くの形容詞対との関係が強いことがわかった。今後、街並みの景観イメージについての考察を行う際に、重要となる形容詞対であると考えられる。

5-2 プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析

5-2-1 実験前後のイメージプロフィールの分析(全体)

サンプル全体の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1 街路景観イメージに関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

サンプル全体の実験前後のイメージプロフィールを図 5-1 に、イメージプロフィールの変動を図 5-2 に示す。

図 5-1 を見てみると、実験を行う前後でイメージプロフィールが大きく変化していることがわかる。半数近くの形容詞対に対する評定平均値が大きく変化している。実験を行うことによって、対象地域の景観イメージが変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-2 を見てみると、対象地域の景観イメージは実験を行うことによって、「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが高くなることがわかった。実験を行うことによって、華やかさや明るさなどといった街並みの雰囲気イメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-3 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「乱雑な-整った」、「にぎやかな-さびしい」の 9 組であった。

上記の 9 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 9 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「乱雑な-整った」、「にぎやかな-さびしい」の 9 組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

サンプル全体の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが変化することがわかった。また、イメージの変動の傾向を見てみると、実験を行うことによって街並みのイメージが華やかで、明るく、活気のあるイメージに変化することがわかった。

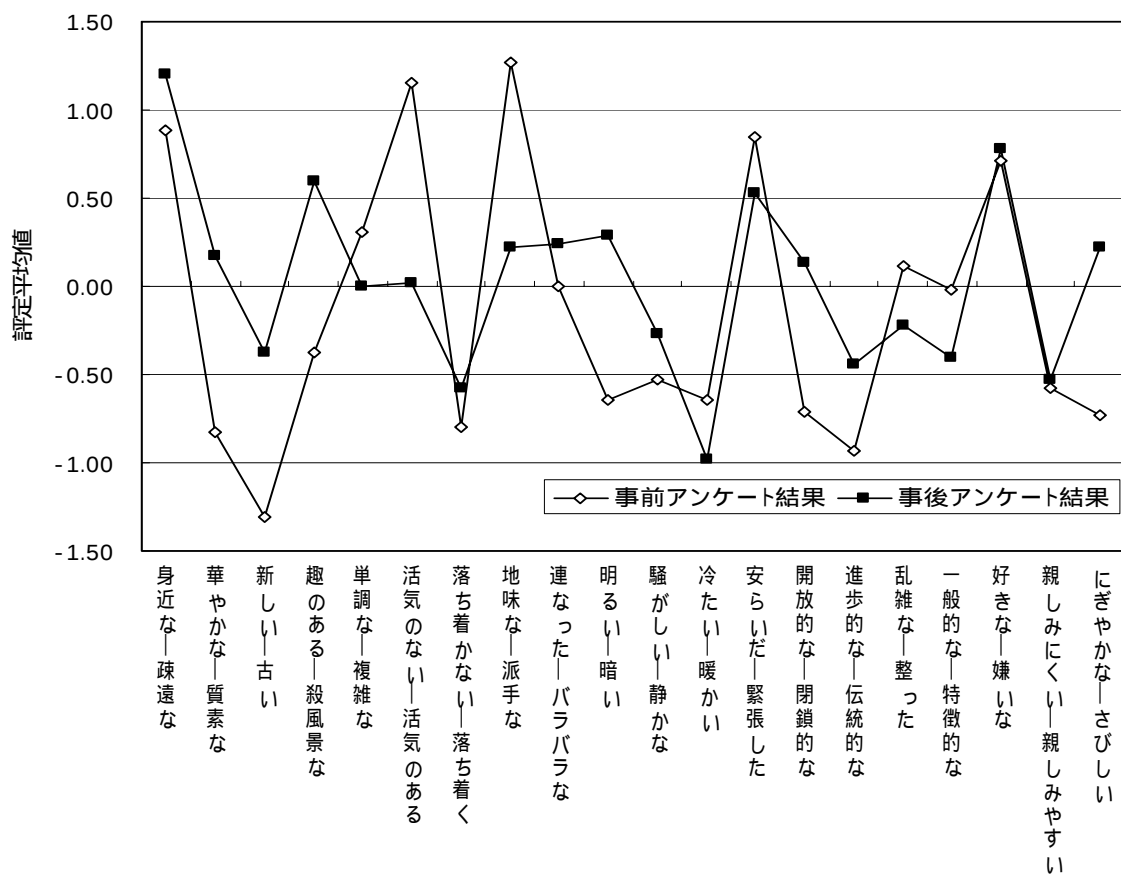


図 5-1 実験前後のイメージプロフィール(全体)

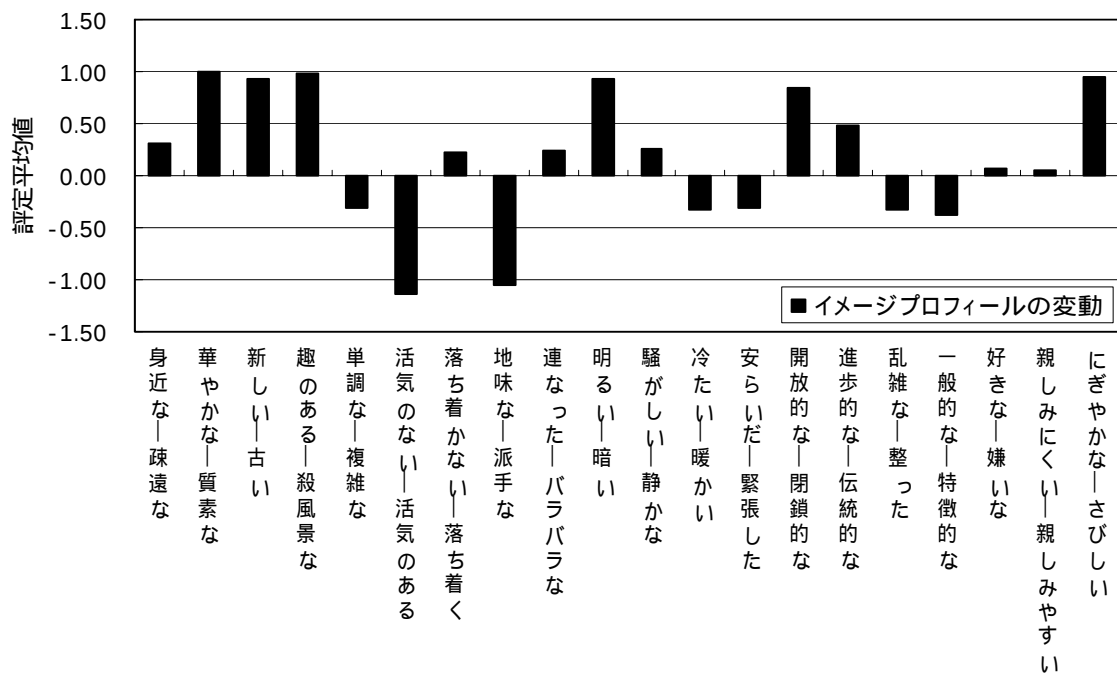


図 5-2 実験前後のイメージプロフィールの変動(全体)

表 5-3 実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(全体)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-1.53209	44	0.133
華やかな-質素な	-4.16754	44	0.000
新しい-古い	-4.62023	44	0.000
趣のある-殺風景な	-4.89576	44	0.000
単調な-複雑な	1.57106	44	0.123
活気のない-活気のある	4.33712	44	0.000
落ち着かない-落ち着く	-1.18375	44	0.243
地味な-派手な	4.74552	44	0.000
連なった-バラバラな	-1.12003	44	0.269
明るい-暗い	-4.31117	44	0.000
騒がしい-静かな	-1.21870	44	0.229
冷たい-暖かい	1.88372	44	0.066
安らいだ-緊張した	1.65884	44	0.104
開放的な-閉鎖的な	-4.05396	44	0.000
進歩的な-伝統的な	-1.97566	44	0.054
乱雑な-整った	2.47207	44	0.017
一般的な-特徴的な	1.84985	44	0.071
好きな-嫌いな	-0.50287	44	0.618
親しみにくい-親しみやすい	-0.26448	44	0.793
にぎやかな-さびしい	-4.81714	44	0.000

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-2 実験前後のイメージプロフィールの分析(参画者)

参画者 29 人の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1 街路景観イメージに関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

参画者の実験前後のイメージプロフィールを図 5-3 に、イメージプロフィールの変動を図 5-4 に示す。

図 5-3 を見てみると、実験を行う前後でイメージプロフィールの波形が大きく変化していることがわかる。ほぼ全ての形容詞対に対する評定平均値が大きく変化している。実験を行うことによって、参画者の抱く景観イメージが大きく変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-4 を見てみると、対象地域の景観イメージは、「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「複雑な」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「進歩的な」、「整った」、「特徴的な」、「にぎやかな」のイメージが高くなることがわかった。実験を行うことによって、華やかさや明るさなどといった雰囲気イメージと開放感や整いといった空間構成のイメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-4 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「5-2-1 実験前後のイメージプロフィールの分析(全体)」で実験前後の評定平均の差が確認された、9 組の形容詞対に「単調な-複雑な」、「進歩的な-伝統的な」、「一般的な-特徴的な」の 3 組を加えた計 12 組であった。

参画グループの実験前後のアンケート結果において、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「単調な-複雑な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「進歩的な-伝統的な」、「乱雑な-整った」、「一般的な-特徴的な」、「にぎやかな-さびしい」の 12 組である。

上記の 12 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 12 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「華やかな-質素な」、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「単調な-複雑な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「進歩的な-伝統的な」、「乱雑な-整った」、「一般的な-特徴的な」、「にぎやかな-さびしい」の12組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

参画者の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、参画者は実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが大きく変化することがわかった。景観イメージの変化は、サンプル全体の変化よりも大きい。

実験前後のイメージの変動の傾向を見てみると、サンプル全体と同様に街並みのイメージが華やかで、明るく、活気のあるイメージに変化することがわかった。また、参画者の特徴としては、サンプル全体に比べて、特徴的で、進歩的なイメージを街並みに感じる傾向にあることがわかった。

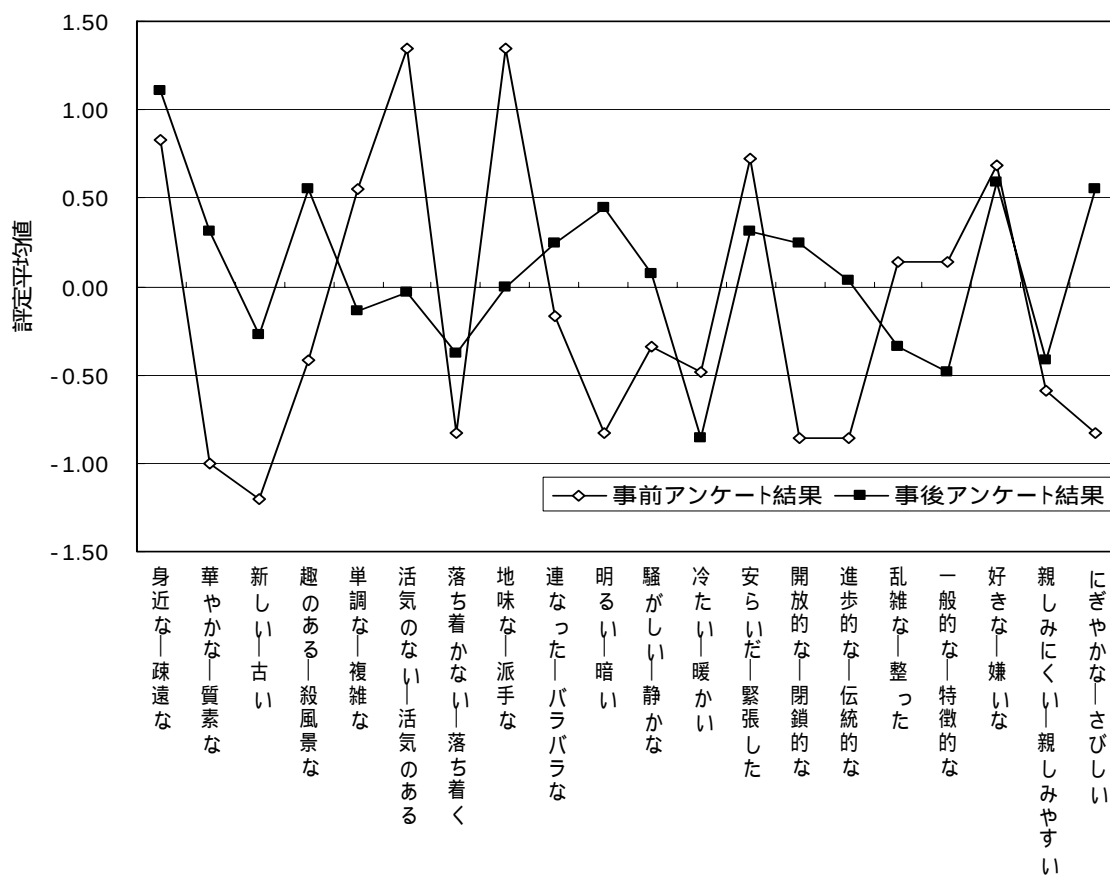


図 5-3 実験前後のイメージプロフィール(参画者)

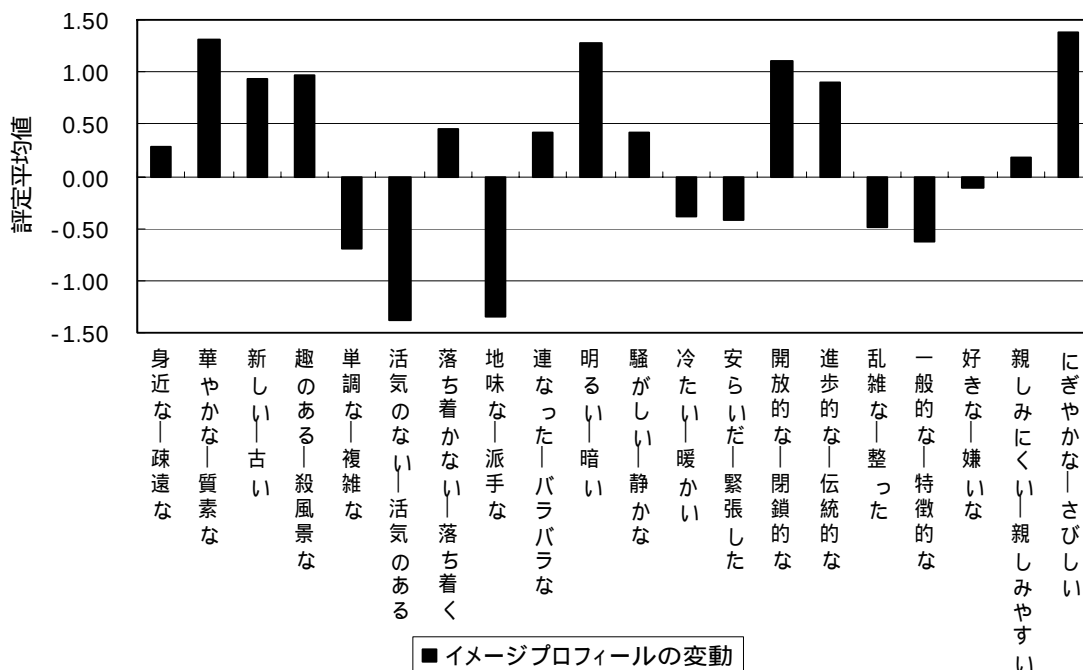


図 5-4 実験前後のイメージプロフィールの変動(参画者)

表 5-4 実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(参画者)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-0.96913	28	0.341
華やかな-質素な	-4.11822	28	0.000
新しい-古い	-3.22055	28	0.003
趣のある-殺風景な	-3.78043	28	0.001
単調な-複雑な	2.62129	28	0.014
活気のない-活気のある	3.91427	28	0.001
落ち着かない-落ち着く	-1.68939	28	0.102
地味な-派手な	4.37993	28	0.000
連なった-バラバラな	-1.46214	28	0.155
明るい-暗い	-4.29082	28	0.000
騒がしい-静かな	-1.30986	28	0.201
冷たい-暖かい	1.57951	28	0.125
安らいだ-緊張した	1.65055	28	0.110
開放的な-閉鎖的な	-3.79389	28	0.001
進歩的な-伝統的な	-2.68271	28	0.012
乱雑な-整った	2.73811	28	0.011
一般的な-特徴的な	2.26779	28	0.031
好きな-嫌いな	0.61885	28	0.541
親しみにくい-親しみやすい	-0.81728	28	0.421
にぎやかな-さびしい	-5.30812	28	0.000

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-3 実験前後のイメージプロフィールの分析(不参画者)

不参画者 16 人の実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、イメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは「5-1 街路景観イメージに関するアンケート結果」で述べた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

不参画者の実験前後のイメージプロフィールを図 5-5 に、イメージプロフィールの変動を図 5-6 に示す。

図 5-5 を見てみると、実験を行う前後で一部の形容詞対については、評定平均値に違いが見られるものの、全体的なイメージプロフィールの波形はほぼ同一である。評定平均値に変化が見られた形容詞対は「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「活気のない-活気のある」の 3 組の形容詞対のみである。上記 3 つの形容詞対は、実験を行うことによって、評定平均が変動したと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-6 を見てみると、対象地域の景観イメージは、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」のイメージが強くなることがわかった。実験を行うことによって、趣や活気などといった街並みのイメージが向上したと考えられる。

そこで、統計的にこの差を明らかにするために、実験前後の各形容詞対への回答結果に対して、t 検定(対応のある 2 つの母平均の差の検定)を行った。検定は有意水準 0.05 で行った。

検定結果を表 5-5 に示す。

t 検定の結果、有意確率が有意水準 0.05 を下回った形容詞対は、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「地味な-派手な」の 3 組の形容詞対であった。

上記の 3 組の形容詞対は、有意確率が有意水準 0.05 を下回ったために、帰無仮説は棄却される。つまり、実験前後における、上記 3 組の各形容詞対への回答結果に 5%水準で有意差があると言える。

以上の結果より、実験を行うことによって、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」、「派手な-地味な」の 3 組の形容詞対で評価される景観イメージが変動したことがわかった。

参画者の実験前後のイメージプロフィールの分析を行った結果、不参画者は実験を行うことによって、対象地域に対する景観イメージが変化するもの。しかし、サンプル全体と比べると、景観イメージの変化は小さいことがわかった。

実験前後のイメージの変動の傾向を見てみると、街並みのイメージが新しく、趣のある、派手なイメージに変化することがわかった。不参画者の特徴は、サンプル全体や参画者が感じたような街並みの明るさや華やかさ、にぎやかさを感じない傾向にあることがわかった。

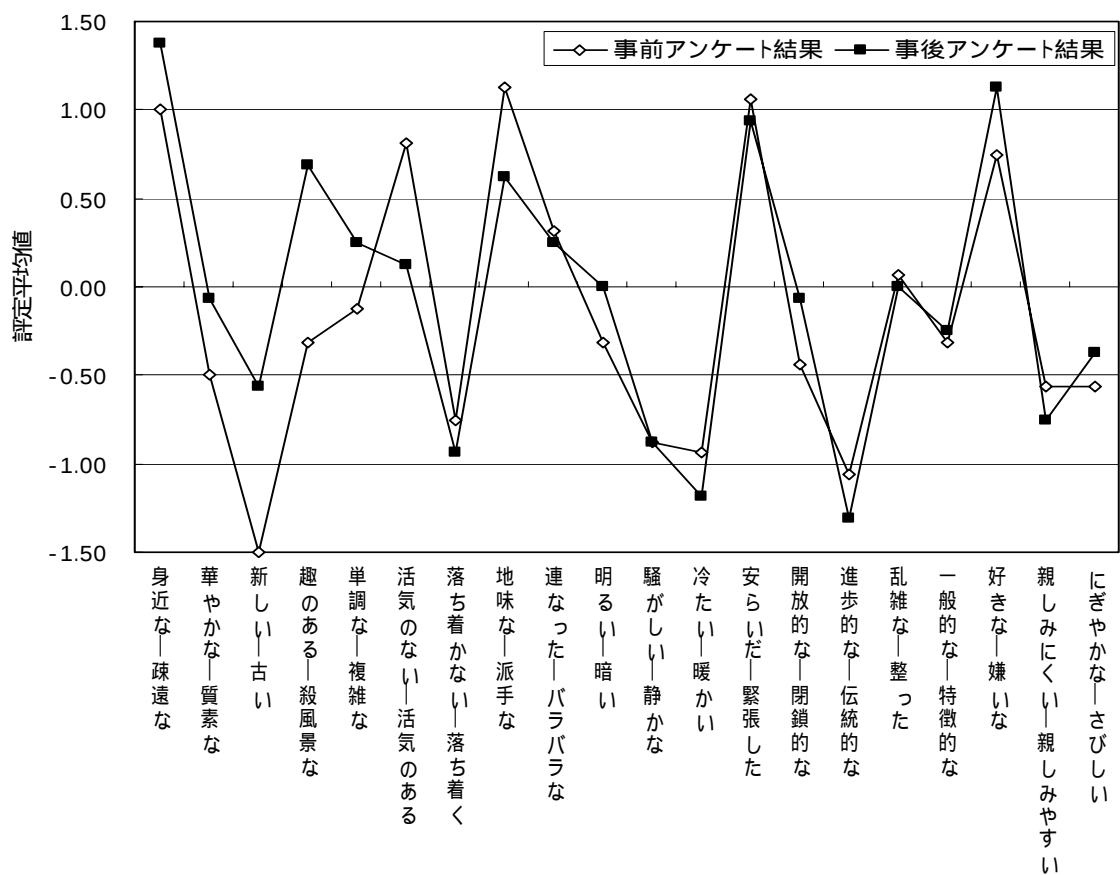


図 5-5 実験前後のイメージプロフィール(不参画者)

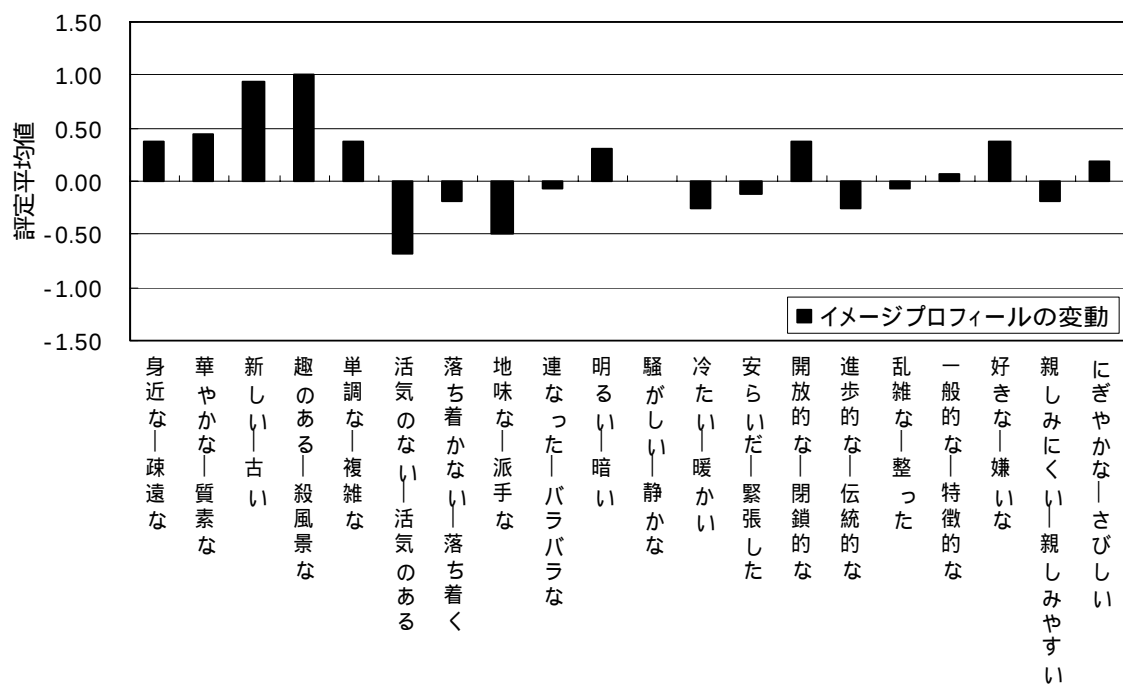


図 5-6 実験前後のイメージプロフィールの変動(不参画者)

表 5-5 実験前後の形容詞対の評定平均値の t 検定(不参画者)

	t 値	自由度	有意確率 (両側)
身近な-疎遠な	-1.46385	15	0.164
華やかな-質素な	-1.38530	15	0.186
新しい-古い	-4.03786	15	0.001
趣のある-殺風景な	-3.03822	15	0.008
単調な-複雑な	-1.86052	15	0.083
活気のない-活気のある	1.96303	15	0.068
落ち着かない-落ち着く	1.00000	15	0.333
地味な-派手な	2.23607	15	0.041
連なった-バラバラな	0.18656	15	0.855
明るい-暗い	-1.43150	15	0.173
騒がしい-静かな	0.00000	15	1.000
冷たい-暖かい	1.00000	15	0.333
安らいだ-緊張した	0.45964	15	0.652
開放的な-閉鎖的な	-1.69480	15	0.111
進歩的な-伝統的な	0.93934	15	0.362
乱雑な-整った	0.32388	15	0.751
一般的な-特徴的な	-0.23527	15	0.817
好きな-嫌いな	-1.86052	15	0.083
親しみにくい-親しみやすい	0.67648	15	0.509
にぎやかな-さびしい	-1.00000	15	0.333

網掛けの数値：有意確率 0.05 以下の数値

5-2-4 実験前後のイメージプロフィールの変動の比較(参画者×不参画者)

参画者と不参画者の実験前後における景観イメージの変動の差を明らかにするために、参画者と不参画者のイメージプロフィールの変動を作成した。

参画者と不参画者のイメージプロフィールの変動を図 5-7 に示す。

図 5-7 を見てみると、全体的に参画者の方がイメージプロフィールの変動が大きいことがわかる。特に「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「にぎやかな-さびしい」の 7 組の形容詞対では、イメージプロフィールの変動に大きな差がある。また、参画者と不参画者でイメージプロフィールの変動にほとんど差が見られなかった形容詞対は、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の 2 組である。

以上の結果より、全体的に見ると実験に参画した場合の方が、参画しなかった場合よりも景観イメージが大きく変動することがわかった。特に変動の差が顕著に現れた形容詞対は、「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「地味な-派手な」、「明るい-暗い」、「開放的な-閉鎖的な」、「にぎやかな-さびしい」の 7 組であった。また、「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の 2 組の形容詞対では、参画した場合と参画しなかった場合の景観イメージの変動にほとんど差が無いことがわかった。

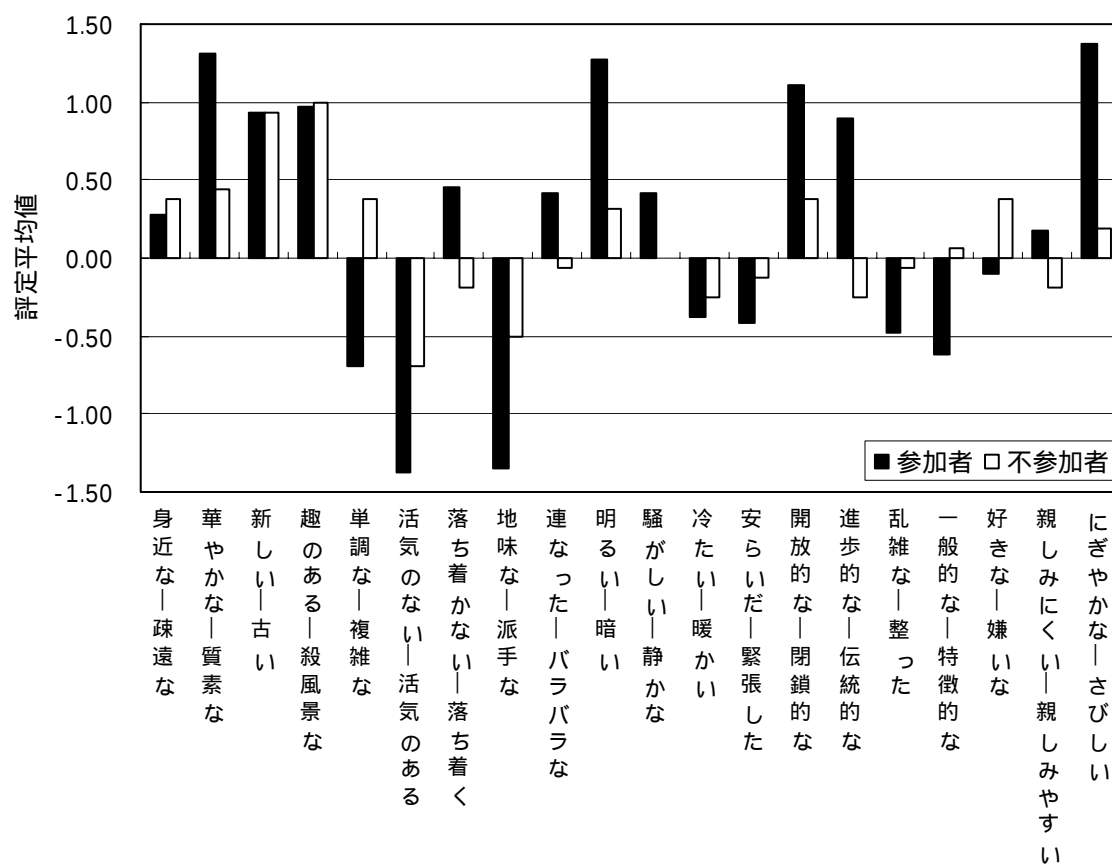


図 5-7 実験前後のイメージプロフィールの変動(参画者×不参画者)

5-2-5 実験への参画タイプごとの実験前後のイメージプロフィールの分析

実験への参画タイプごとの実験前後における景観イメージの傾向を明らかにするために、「5-1 景観イメージに関するアンケート結果」で行った単純集計と同様に集計を行い、参画タイプごとの各形容詞対の評定平均値、標準偏差の算出を行った。

評定平均値と標準偏差を表 5-6 に示す。

評定平均値、標準偏差の算出を行った後、参画タイプごとのイメージプロフィールを作成した。イメージプロフィールは表 5-6 で求めた集計結果を基に作成した。また、同時に実験前後におけるイメージプロフィールの変動を作成した。

参画タイプとは、実験への参画度によって参画者を高参画者(20 人)と低参画者(12 人)の 2 つの参画タイプに分類したものである。詳細は「4-6 実験への参画度によるサンプルの分類」を参照。

参画タイプごとのイメージプロフィールを図 5-8 に、イメージプロフィールの変動を図 5-9 に示す。

図 5-8 を見てみると、高参画者と低参画者では、実験前のイメージプロフィール、実験後のイメージプロフィールのどちらの波形もほぼ同一である。全体的な波形に大きな違いは見られない。実験への参画度は対象地域の景観イメージに大きな影響を与えないと考えられる。

次に、実験を行うことによって変動したイメージの傾向に注目する。図 5-9 を見てみると、一部の形容詞対の変動には差が見られるものの、全体的なイメージプロフィールの変動に大きな差は見られない。高参画者と低参画者で実験前後の変動に差が見られた形容詞対は、「にぎやかな-さびしい」であった。「にぎやかな-さびしい」の形容詞対では、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっている。ここで、図 5-8 を見てみると、実験後の「にぎやかな-さびしい」の形容詞対への回答には大きな差が無い。つまり、「にぎやかな-さびしい」の形容詞対は、実験前のイメージの差によって変動に差が出ていることがわかる。

以上の結果より、高参画者と低参画者のイメージプロフィールに大きな差が無いことがわかった。また、実験前後のイメージプロフィールの変動においても、一部の形容詞対を除き、変動に大きな差は見られなかった。

イメージプロフィールの変動に差が見られた形容詞対は「にぎやかな-さびしい」であった。「にぎやかな-さびしい」の形容詞対では、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっていることがわかった。これは、実験前のイメージの差が原因であると考えられる。

表 5-6 形容詞対の評定平均値と標準偏差(高参画者×低参画者)

	高参画者				低参画者			
	事前		事後		事前		事後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
身近な—疎遠な	1.00	1.25	1.17	1.12	0.55	1.44	1.00	1.28
華やかな—質素な	-1.06	0.91	0.22	1.51	-0.91	0.67	0.45	1.37
新しい—古い	-1.22	0.92	-0.22	1.36	-1.18	0.72	-0.36	1.37
趣のある—殺風景な	-0.44	1.30	0.50	1.38	-0.36	1.07	0.64	1.23
単調な—複雑な	0.67	1.29	-0.06	1.13	0.36	0.64	-0.27	1.05
活気のない—活気のある	1.28	1.19	0.00	1.60	1.45	1.08	-0.09	1.50
落ち着かない—落ち着く	-0.94	0.91	-0.44	1.21	-0.64	1.07	-0.27	0.96
地味な—派手な	1.17	0.90	0.11	1.41	1.64	0.77	-0.18	1.34
連なった—バラバラな	-0.17	1.26	-0.06	1.31	-0.18	1.53	0.73	1.14
明るい—暗い	-0.83	1.07	0.33	1.45	-0.82	1.11	0.64	1.23
騒がしい—静かな	-0.78	1.18	-0.22	1.31	0.36	1.37	0.55	0.89
冷たい—暖かい	-0.67	0.75	-0.94	1.18	-0.18	0.94	-0.73	1.05
安らいだ—緊張した	0.89	0.99	0.44	1.21	0.45	0.99	0.09	1.08
開放的な—閉鎖的な	-0.61	1.30	0.33	1.45	-1.27	0.86	0.09	1.50
進歩的な—伝統的な	-0.83	1.12	0.11	1.29	-0.91	0.90	-0.09	1.16
乱雑な—整った	0.06	0.91	-0.39	0.59	0.27	0.75	-0.27	0.86
一般的な—特徴的な	0.28	1.19	-0.44	0.83	-0.09	1.31	-0.55	1.08
好きな—嫌いな	0.72	0.73	0.56	0.96	0.64	0.98	0.64	1.30
親しみにくい—親しみやすい	-0.67	1.00	-0.44	0.96	-0.45	1.23	-0.36	1.23
にぎやかな—さびしい	-0.61	0.95	0.39	1.57	-1.18	0.57	0.82	1.19

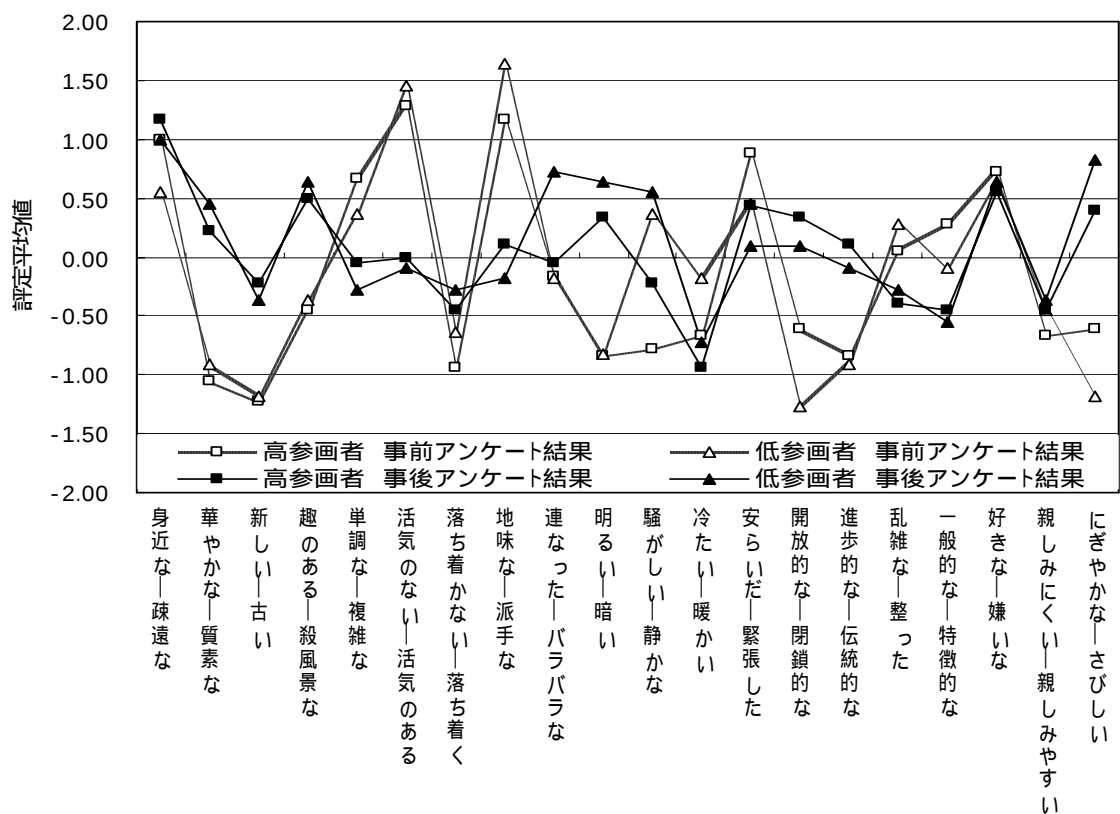


図 5-8 実験前後のイメージプロフィール(高参画者×低参画者)

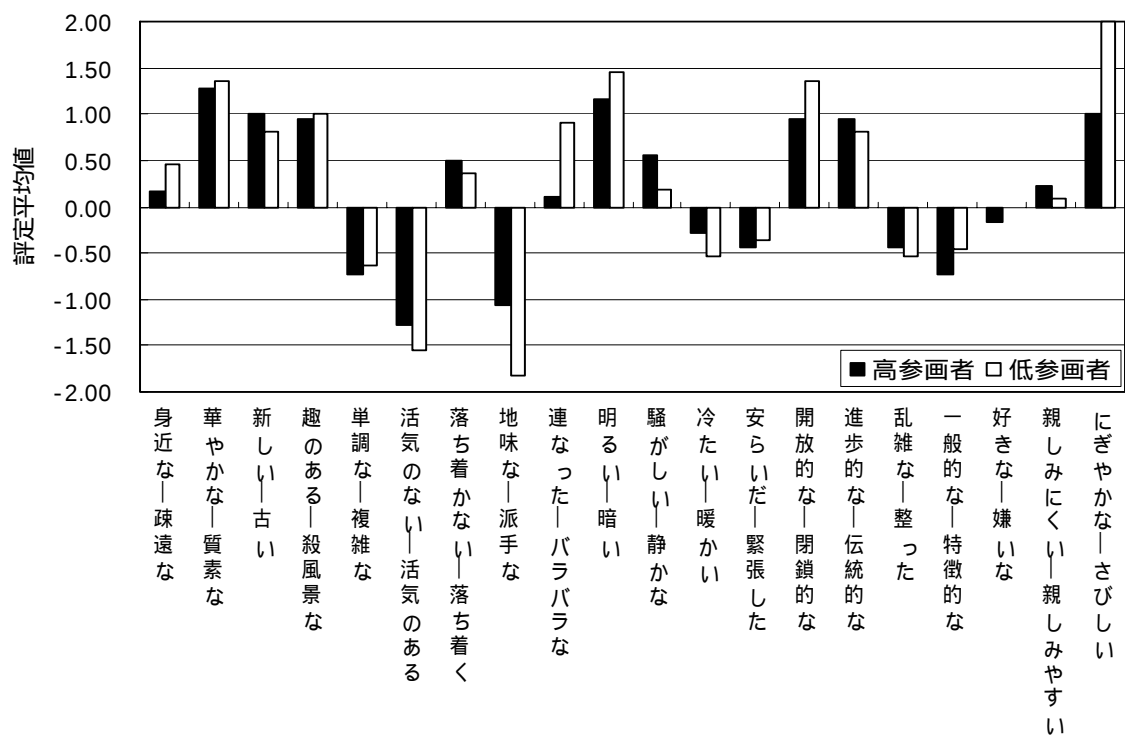


図 5-9 実験前後のイメージプロフィールの変動(高参画者×低参画者)

5-2-6 プロフィール分析から見た街並みの景観イメージのまとめ

プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析から街並みに対する景観イメージの傾向を読み取った。サンプル全体と各サンプルグループの街並みに対する景観イメージの傾向を以下に述べる。

- サンプル全体の景観イメージの傾向を見てみると、実験を行うことによって対象地域に対する景観イメージが変化している。
- サンプル全体では、実験を行うことによって「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが強くなる。
- 参画者の方が不参画者よりも、全体的に事件前後のイメージの変動が大きい。
- 不参画者と比べて、実験を行うことによって「華やかな」、「新しい」、「趣のある」、「活気のある」、「派手な」、「明るい」、「開放的な」、「整った」、「にぎやかな」のイメージが強くなる。
- 「新しい-古い」、「趣のある-殺風景な」の2組の形容詞対は、実験前後で大きく変動した形容詞対である。これらの形容詞対の変動の大きさは、参画者と不参画者でほとんど差が無い。
- 高参画者と低参画者では、実験前のイメージプロフィール、実験後のイメージプロフィールのどちらの波形もほぼ同一であり、全体的な波形に大きな違いは見られない。
- 高参画者と低参画者で、イメージプロフィールの変動に差が見られた形容詞対は「にぎやかな-さびしい」であり、低参画者の方が実験前後の変動が大きくなっている。

以上の結果より、考察を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなったと言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画した場合の方が、参画しなかった場合に比べ、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなると言える。
- 街並みの新しさ、趣のイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とは関係なく、強くなると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、景観イメージの変化に大きな影響を与えないと言える。
- にぎやかな街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが低い方が大きく変動する。これは、参画の度合いが低いサンプルが、様々なものを飾り付けて積極的に「色彩参画」を行っているサンプルを見ることによって、街並みの賑わいを感じたためであると考えられる。

5-3 因子分析による街並みの景観イメージの分析

5-3-1 因子の抽出

実験対象地域の景観イメージを明らかにするために、KMO 及び Bartlett の球面性検定を行った後、因子分析を行った。KMO 及び Bartlett の球面性検定は有意水準 0.05 でおこなった。因子分析は因子抽出法として主因子法、回転はバリマックス回転を採用した。

データは「5-1 景観イメージに関するアンケート結果」と同様に、景観イメージの分析対象としたアンケート(参画者 58 枚、不参画者 32 枚、計 90 枚)による、街路景観イメージに関するアンケート項目への回答結果を用いた。

KMO 及び Bartlett の球面性検定結果を表 5-7 に示す。

KMO を行った結果、 $KMO = 0.875$ であった。 $KMO = 0.875 > 0.5$ となり、本研究で用いた 20 組の形容詞対への回答結果を用いて因子分析を行うことに意味があることが明らかとなった。

Bartlett の球面性検定を行った結果、有意確率 0.000 であった。有意確率 $0.000 < 0.05$ となり、本研究で用いた 20 組の形容詞対に関連があることがわかった。

因子分析の結果、得られた各形容詞対の共通性を表 5-7 に示す。

表 5-8 を見てみると、全ての形容詞対で、共通性の値が 0.4 以上である。そのため、全ての形容詞対が因子分析に貢献していることがわかった。よって、本研究で用いた 20 組の形容詞対の全てを用いて因子分析を行うことは妥当であると考えた。

因子分析の結果、得られた因子の固有値、累積寄与率を表 5-8 に示す。

表 5-8 を見てみると、固有値が 1.0 を超えている因子は第 4 因子までである。そのため、第 4 因子までを採用する。また、累積寄与率は第 4 因子までで 65%を超えている。

表 5-7 KMO 及び Bartlett の検定結果

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		0.875
Bartlett の球面性検定	近似が 2 乗	1107.618
	自由度	190
	有意確率	0.000

表 5-8 各形容詞対の共通性

	共通性
身近な-疎遠な	0.409024
華やかな-質素な	0.628872
新しい-古い	0.581612
趣のある-殺風景な	0.713272
単調な-複雑な	0.460825
活気のない-活気のある	0.704818
落ち着かない-落ち着く	0.702792
地味な-派手な	0.810566
連なった-バラバラな	0.603545
明るい-暗い	0.784068
騒がしい-静かな	0.498045
冷たい-暖かい	0.693821
安らいだ-緊張した	0.610334
開放的な-閉鎖的な	0.706796
進歩的な-伝統的な	0.622947
乱雑な-整った	0.437681
一般的な-特徴的な	0.493668
好きな-嫌いな	0.593523
親しみにくい-親しみやすい	0.543087
にぎやかな-さびしい	0.699992

表 5-9 因子分析による固有値と累積寄与率

	固有値	寄与率	累積寄与率
因子 No.1	7.2304	36.15%	36.15%
因子 No.2	4.2394	21.20%	57.35%
因子 No.3	1.2209	6.10%	63.45%
因子 No.4	1.0226	5.11%	68.57%
因子 No.5	0.8232	4.12%	72.68%
因子 No.6	0.7249	3.62%	76.31%
因子 No.7	0.6253	3.13%	79.43%
因子 No.8	0.5722	2.86%	82.29%
因子 No.9	0.5273	2.64%	84.93%
因子 No.10	0.4284	2.14%	87.07%
因子 No.11	0.4043	2.02%	89.09%
因子 No.12	0.3552	1.78%	90.87%
因子 No.13	0.3246	1.62%	92.49%
因子 No.14	0.3119	1.56%	94.05%
因子 No.15	0.2989	1.49%	95.55%
因子 No.16	0.2353	1.18%	96.72%
因子 No.17	0.2128	1.06%	97.79%
因子 No.18	0.1765	0.88%	98.67%
因子 No.19	0.1336	0.67%	99.34%
因子 No.20	0.1323	0.66%	100.00%

網掛けの因子：固有値 1.0 以上の因子

5-3-2 因子の解釈

バリマックス回転後の第1因子から第4因子までの因子負荷量を表5-10に示し、第1因子と第2因子の因子負荷両を表5-11に、第3因子と第4因子の因子負荷両を表5-12に示す。

因子の解釈には、バリマックス回転後の因子負荷量を用いて考察を行った。考察は因子負荷量の大きさを絶対値で判断し、マイナスの数値は形容詞対を逆の意味に解釈して行った。

以下に述べる因子の解釈や考察をわかりやすくするために、先に解釈結果を示す。第1因子は街並みの「活気度」軸、第2因子は街並みの「親接度」軸、第3因子は街並みの「整然度」軸、第4因子は街並みの「静寂度」軸と解釈を行った。

第1因子は、「華やかな-質素な」、「活気のない-活気のある」、「明るい-暗い」、「にぎやかな-さびしい」といった、街並みの雰囲気、明るさに関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「活気度」を表している因子であると解釈した。

第2因子は、「好きな-嫌いな」、「冷たい-暖かい」、「親しみにくい-親しみやすい」、「身近な-疎遠な」といった、街並みの印象、精神的な距離感に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「親接度」を表している因子であると解釈した。

第3因子は、「乱雑な-整った」、「連なった-バラバラな」、「一般的な-特徴的な」といった、街並みの空間構造、統一感に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「整然度」を表している因子であると解釈した。

第4因子は、「騒がしい-静かな」、「単調な-複雑な」といった、街並みの喧騒に関する形容詞対が高い負荷量を示している。そのため、この因子は街並みの「静寂度」を表している因子であると解釈した。

表 5-10 各因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
地味な-派手な	-0.847	0.068	0.334	-0.011
新しい-古い	0.764	0.100	0.069	0.052
華やかな-質素な	0.743	-0.020	-0.169	0.090
開放的な-閉鎖的な	0.735	0.322	-0.169	0.038
明るい-暗い	0.732	0.380	-0.226	0.220
活気のない-活気のある	-0.711	-0.136	0.319	-0.066
趣のある-殺風景な	0.678	0.461	-0.145	0.135
にぎやかな-さびしい	0.673	0.025	-0.334	0.282
進歩的な-伝統的な	0.672	-0.321	-0.058	0.146
安らいだ-緊張した	-0.535	0.464	-0.031	-0.276
好きな-嫌いな	0.124	0.763	-0.155	-0.027
冷たい-暖かい	-0.236	-0.759	0.213	0.073
親しみにくい-親しみやすい	0.034	-0.703	0.144	0.012
落ち着かない-落ち着く	0.523	-0.568	-0.065	0.199
身近な-疎遠な	0.074	0.489	-0.106	-0.306
乱雑な-整った	-0.255	-0.160	0.593	0.189
連なった-バラバラな	0.072	0.515	-0.583	0.023
一般的な-特徴的な	-0.233	-0.327	0.563	-0.192
騒がしい-静かな	0.294	-0.307	0.113	0.590
単調な-複雑な	-0.317	0.001	0.374	-0.455

表 5-11 第 1 因子、第 2 因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 1 因子			第 2 因子	
新しい-古い	0.764	活気あり  活気なし	好きな-嫌いな	0.763	身近  疎遠
華やかな-質素な	0.743		連なった-バラバラな	0.515	
開放的な-閉鎖的な	0.735		安らいだ-緊張した	0.464	
明るい-暗い	0.732		趣のある-殺風景な	0.461	
趣のある-殺風景な	0.678		身近な-疎遠な	0.489	
にぎやかな-さびしい	0.673		明るい-暗い	0.380	
進歩的な-伝統的な	0.672		開放的な-閉鎖的な	0.322	
落ち着かない-落ち着く	0.523		にぎやかな-さびしい	0.025	
騒がしい-静かな	0.294		新しい-古い	0.100	
好きな-嫌いな	0.124		地味な-派手な	0.068	
身近な-疎遠な	0.074		単調な-複雑な	0.001	
連なった-バラバラな	0.072		華やかな-質素な	-0.020	
親しみにくい-親しみやすい	0.034		活気のない-活気のある	-0.136	
一般的な-特徴的な	-0.233		乱雑な-整った	-0.160	
冷たい-暖かい	-0.236		騒がしい-静かな	-0.307	
乱雑な-整った	-0.255		進歩的な-伝統的な	-0.321	
単調な-複雑な	-0.317		一般的な-特徴的な	-0.327	
安らいだ-緊張した	-0.535		落ち着かない-落ち着く	-0.568	
活気のない-活気のある	-0.711		親しみにくい-親しみやすい	-0.703	
地味な-派手な	-0.847		冷たい-暖かい	-0.759	

表 5-12 第 3 因子、第 4 因子の因子負荷量(バリマックス回転後)

	第 3 因子				第 4 因子	
乱雑な-整った	0.593	乱雑 ↑ ↓ 整然	騒がしい-静かな にぎやかな-さびしい 明るい-暗い 落ち着かない-落ち着く 乱雑な-整った 進歩的な-伝統的な 趣のある-殺風景な 華やかな-質素な 冷たい-暖かい 新しい-古い 開放的な-閉鎖的な 連なった-バラバラな 親しみにくい-親しみやすい 地味な-派手な 好きな-嫌いな 活気のない-活気のある 一般的-特徴的な 安らいだ-緊張した 身近な-疎遠な 単調な-複雑な	喧噪 ↑ ↓ 静寂	0.590	
一般的な-特徴的な	0.563				0.282	
単調な-複雑な	0.374				0.220	
地味な-派手な	0.334				0.199	
活気のない-活気のある	0.319				0.189	
冷たい-暖かい	0.213				0.146	
親しみにくい-親しみやすい	0.144				0.135	
騒がしい-静かな	0.113				0.090	
新しい-古い	0.069				0.073	
安らいだ-緊張した	-0.031				0.052	
進歩的な-伝統的な	-0.058				0.038	
落ち着かない-落ち着く	-0.065				0.023	
身近な-疎遠な	-0.106				0.012	
趣のある-殺風景な	-0.145				-0.011	
好きな-嫌いな	-0.155				-0.027	
華やかな-質素な	-0.169				-0.066	
開放的な-閉鎖的な	-0.169				-0.192	
明るい-暗い	-0.226				-0.276	
にぎやかな-さびしい	-0.334				-0.306	
連なった-バラバラな	-0.583				-0.455	

次に、各因子の因子得点の扱いについて、各形容詞対の因子負荷量を基に考察を行う。マイナスの因子負荷量は形容詞対を逆の意味に解釈して考察を行う。

各因子軸の解釈を表 5-13 に示す。

第 1 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「華やかな-質素な」、「明るい-暗い」、「にぎやかな-さびしい」などである。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「地味な-派手な」、「活気のない-活気のある」などである。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 1 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「華やかな」、「明るい」、「にぎやかな」、「派手な」、「活気のある」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 1 因子の因子得点がプラスである場合を「活気あり」、マイナスである場合を「活気なし」と解釈した。

第 2 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「好きな-嫌いな」、「身近な-疎遠な」の 2 組である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「冷たい-暖かい」、「親しみにくい-親しみやすい」、「落ち着かない-落ち着く」の 3 組である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 2 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「好きな」、「身近な」、「暖かい」、「親しみやすい」、「落ち着く」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 2 因子の因子得点がプラスである場合を「身近」、マイナスである場合を「疎遠」と解釈した。

第 3 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「乱雑-整った」、「一般的-特徴的」の 2 組である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「連なった-バラバラな」である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 3 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「乱雑な」、「一般的な」、「バラバラな」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 3 因子の因子得点がプラスである場合を「乱雑」、マイナスである場合を「整然」と解釈した。

第 4 因子において、因子負荷量がプラスの数値となっている形容詞対は、「騒がしい-静かな」である。因子負荷量がマイナスの数値となっている形容詞対は「単調な-複雑な」である。因子負荷量がマイナスの数値を示した形容詞対に関しては逆の意味に解釈するために、第 4 因子の因子得点がプラスである場合、被験者は対象地域の街並みを「騒がしい」、「複雑な」街並みと評価したことがわかる。以上より、第 4 因子の因子得点がプラスである場合を「喧噪」、マイナスである場合を「静寂」と解釈した。

表 5-13 各因子の解釈

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
プラス	活気あり	身近	乱雑	喧噪
マイナス	活気なし	疎遠	整然	静寂
名称	「活気度」軸	「親接度」軸	「整然度」軸	「静寂度」軸

5-3-3 実験前後の因子得点分布図の分析(参画者×不参画者)

サンプル全体の実験前後における景観イメージを明らかにするために、「5-3-1 因子軸の抽出」で解釈を行った、第1因子から第4因子までをx軸、y軸に用いて、サンプル全体の実験前後の因子得点分布図を作成した。

実験前後の因子得点分布図を図5-10に示す。

図5-10から、実験前後の「活気度」、「親接度」の傾向を読み取った。

参画者、不参画者の事前アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「活気度軸」(x軸)において「活気なし」側への偏りが見られる。実験前の「活気なし」側への偏りは、参画者と不参画者の間で大きな差は見られない。「親接度軸」(y軸)においては、参画者、不参画者ともに「疎遠」、「身近」のどちらにも偏ることなく、分散していることがわかる。

参画者、不参画者の事後アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「活気度軸」(x軸)において「活気あり」側への偏りが見られる。実験後の「活気あり」側への偏りは、参画者の方が不参画者に比べて強くなっている。「親接度軸」(y軸)においては、実験前と同様に参画者、不参画者ともに偏りが見られない。

図5-10から、実験前後の「整然度」、「静寂度」の傾向を読み取った。

参画者、不参画者の事前アンケートの結果を見てみると、参画者、不参画者ともに「整然度軸」(x軸)において明確な偏りは見られなかった。「静寂度軸」(y軸)においても、参画者、不参画者ともに明確な偏りは見られなかった。

参画者、不参画者の事後アンケートの結果を見てみると、参画者は「整然度軸」(x軸)において「整然」側への偏りが見られる。不参画者は「整然度軸」において、原点付近に集まってきていることがわかる。「静寂度軸」(y軸)においては、参画者では「喧噪」側への偏りが見られる。不参画者においては実験前と同様に偏りは見られない。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画者、不参画者ともに因子得点分布が「活気あり」側へ変動する傾向にあることがわかった。実験を行うことによって、参画者は因子得点分布が「活気あり」、「整然」、「喧噪」側へ変動する傾向にあることがわかった。また、不参画者は因子得点分布が「活気あり」側へ変動する傾向にあることがわかった。

「活気あり」側への変動の傾向は、参画者の方が不参画者に比べて強いことがわかった。

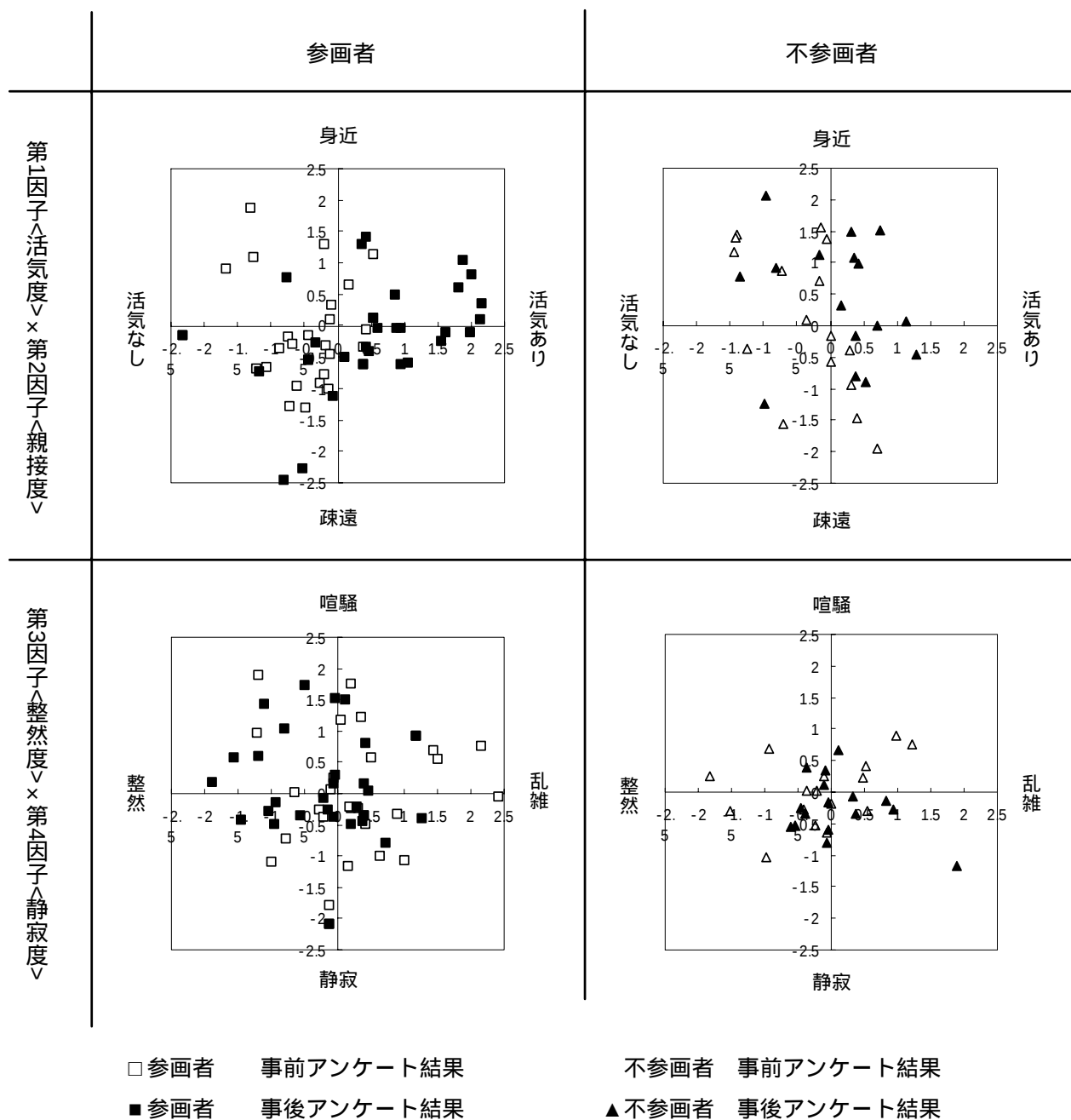


図 5-10 サンプル全体の因子得点分布図

5-3-4 実験前後の因子得点の変動の分析(参画者×不参画者)

実験前後の参画者と不参画者の景観イメージの変動を明らかにするために、「5-3-3 実験前後の因子得点分布図の分析」で示した図 5-10 を基に、参画者と不参画者の因子得点の変動を作成した。

参画者と不参画者の因子得点の変動を図 5-11 に示す。

以下、図 5-11 から読み取った、参画の有無によって分類したグループごとの各因子に対する因子得点の変動の傾向を述べる。

参画者の実験前後の第 1 因子 活気度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。ほぼ全てのサンプルが「活気あり」側へ大きく変動していることがわかる。実験を行うことによって「活気あり」の方向へ街並みの景観イメージが大きく変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 1 因子 活気度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。多くのサンプルが「活気あり」側へ変動していることがわかる。しかし、上記で述べた、参画者の変動ほどの強い傾向は見られない。

参画者の実験前後の第 2 因子 親接度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。多くのサンプルは 親接度 の因子得点に変化していないことがわかる。明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

同様に、不参画者の実験前後の第 2 因子 親接度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。あまり大きくは無いものの、多くのサンプルが「身近」側へ変動していることがわかる。少しではあるが、実験を行うことによって「身近」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。この傾向は参画者には見られない傾向である。

参画者の実験前後の第 3 因子 整然度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。多くのサンプルが「整然」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「整然」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 3 因子 整然度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。不参画者は第 3 因子 整然度 において、参画者のような明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

参画者の実験前後の第 4 因子 静寂度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。多くのサンプルが「喧噪」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「喧噪」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。

同様に、不参画者の実験前後の第 4 因子 静寂度 に対する因子得点の変動の傾向を見える。不参画者は第 4 因子 静寂度 において、参画者のような明確な因子得点の変動の傾向は見られなかった。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、参画者の因子得点分布は、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側へ変動する傾向にあることがわかった。不参画者の因子得点分布は「活気あり」、「身近」側へ変動する傾向にあることがわかった。

実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側に大きく因子得点分布が変動する傾向にあることがわかった。また、「身近」側へは参画しなかった場合の方が、大きく変動する傾向にあることがわかった。

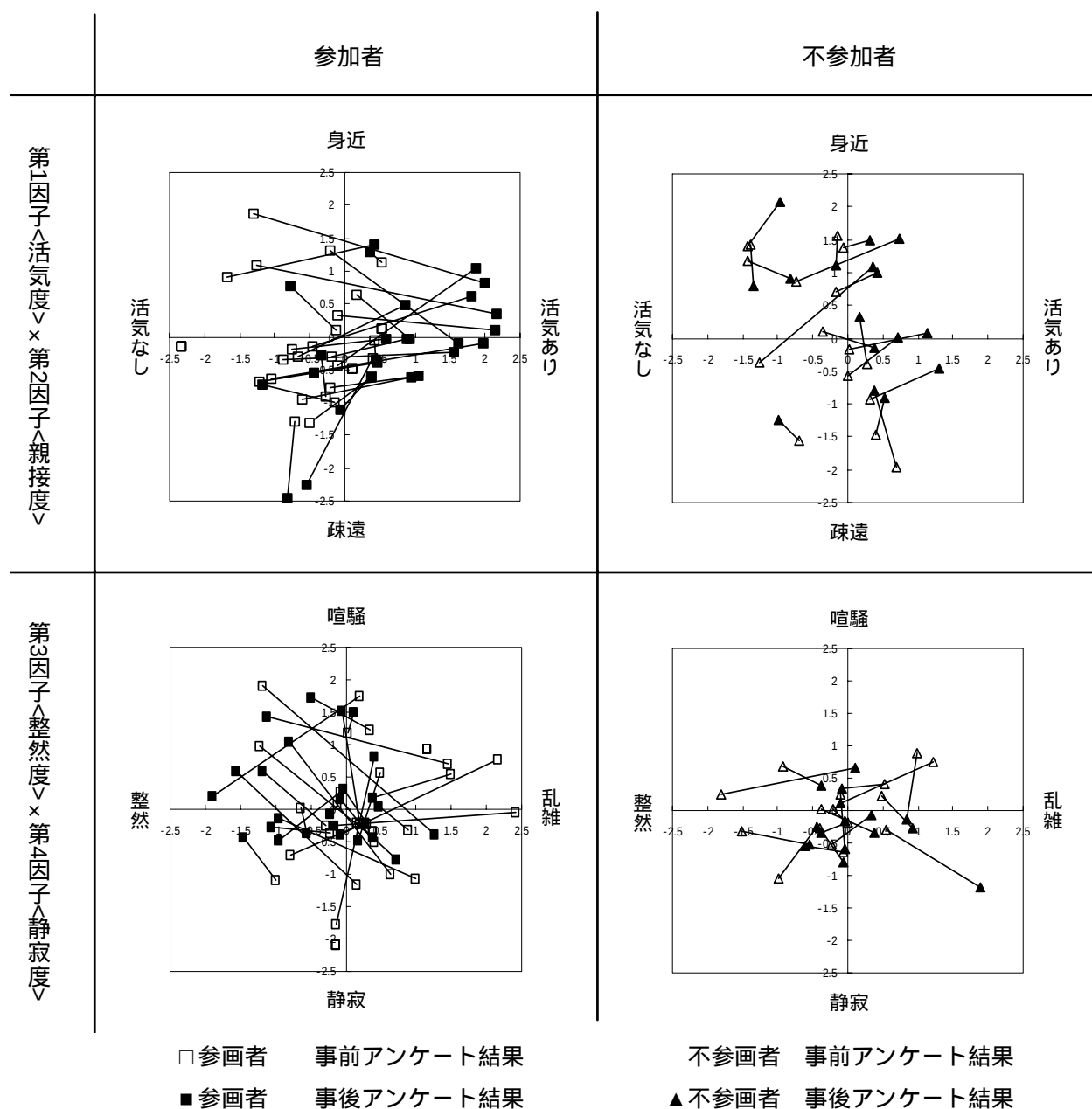


図 5-11 実験前後の因子得点の変動(参画者×不参加者)

5-3-5 実験前後の因子得点の変動の分析(高参画者×低参画者)

実験前後の高参画者と低参画者の景観イメージの変動を明らかにするために、「5-3-4 実験前後の因子得点の変動の分析(参画者×不参画者)」で示した図 5-11 を基に、参画タイプごとの因子得点の変動を作成した。

参画タイプごとの因子得点の変動を図 5-12 に示す。

以下、図 5-12 から読み取った、参画タイプごとの各因子に対する因子得点の変動の傾向を述べる。

参画タイプごとの実験前後の第 1 因子 活気度 に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験を行うことによって「活気あり」の方向へ街並みの景観イメージが大きく変動する傾向にあることがわかる。高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 2 因子 親接度 に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験前後における明確な因子得点の変動の傾向は見られない。上記の第 1 因子 活気度 に対する因子得点の変動と同様に、第 2 因子 親接度 に対する因子得点の変動においても、高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 3 因子 整然度 に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者、低参画者ともに、実験を行うことによって「整然」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。上記の第 1 因子 活気度 や第 2 因子 親接度 に対する因子得点の変動と同様に、第 3 因子 整然度 に対する因子得点の変動に対しても、高参画者と低参画者の変動の大きさに明確な違いは見られない。

参画タイプごとの実験前後の第 4 因子 静寂度 に対する因子得点の変動の傾向を見てみる。高参画者は多くのサンプルが「喧噪」側へ変動していることがわかる。実験を行うことによって「喧噪」の方向へ街並みの景観イメージが変動する傾向にあることがわかる。しかし、低参画者では「喧噪」側へ向かって変動する傾向は見られない。

上記の第 1 因子 活気度 や第 2 因子 親接度、第 3 因子 整然度 に対する因子得点の変動とは違い、第 4 因子 静寂度 に対する因子得点の変動においては、高参画者と低参画者の間で因子得点の変動の傾向に違いがあることがわかった。

以上より、得られた結果を以下にまとめる。

参画タイプごとの因子得点分布の傾向を見てみると、第1因子 活気度、第2因子 親接度、第3因子 整然度の3因子において、変動の傾向に大きな違いは見られない。第4因子 静寂度においては、高参画者と不参画者で変動の違いが見られた。実験への参画の度合いが高い方が、因子得点が「喧噪」側へ変動する傾向にある。

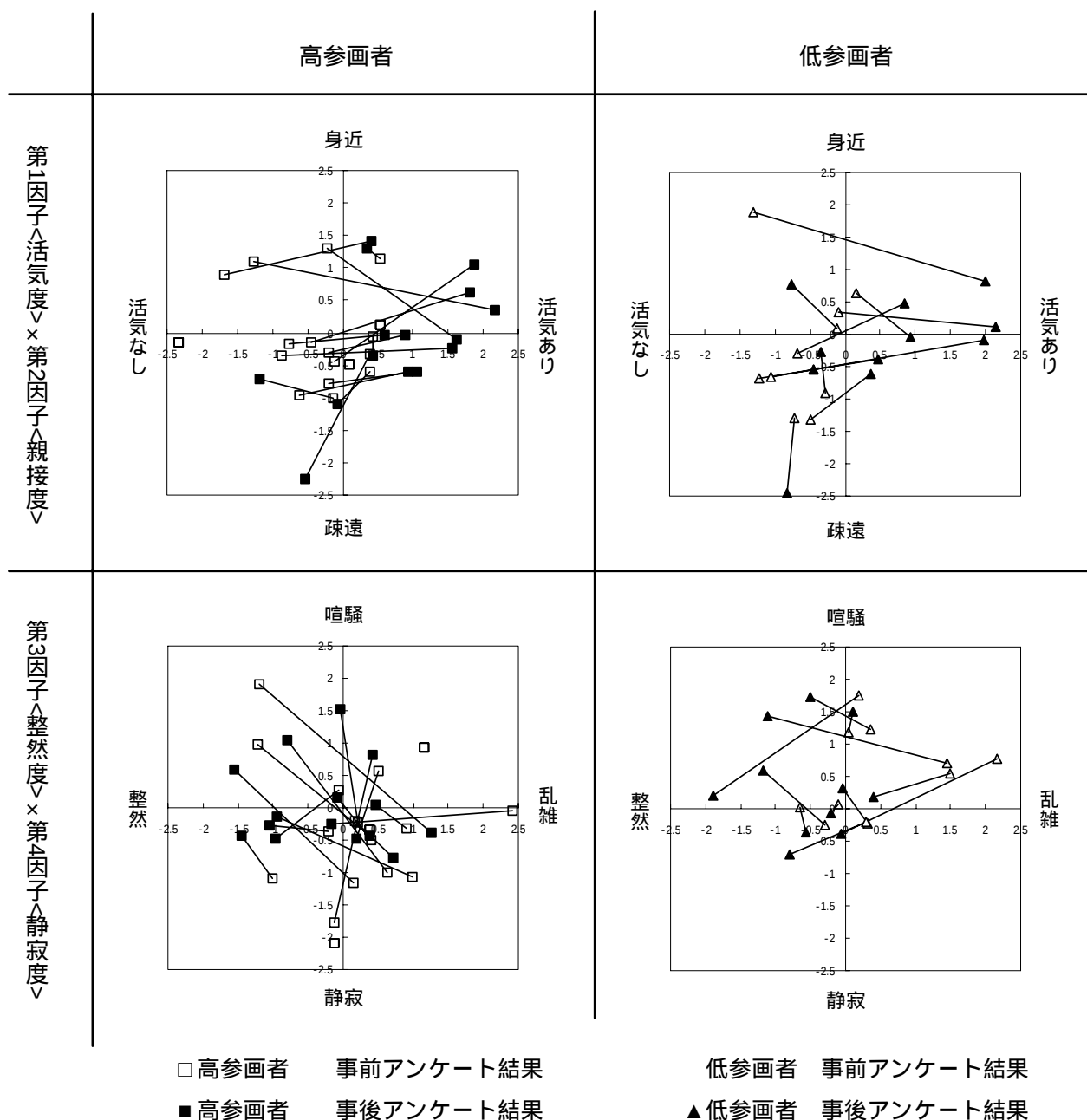


図 5-12 実験前後の因子得点の変動(高参画者×低参画者)

5-3-6 因子分析から見た街並みの景観イメージの変動のまとめ

因子分析による街並みの景観イメージの分析から街並みに対する景観イメージの傾向を読み取った。サンプル全体と各サンプルグループの街並みに対する景観イメージの傾向を以下に述べる。

- サンプル全体の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」側へ変動する傾向にある。
- 参画者の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」、「整然」、「喧噪」側に大きく因子得点分布が変動する傾向にある。
- 不参画者の因子得点分布図の傾向を見てみると、実験を行うことによって、「活気あり」、「身近な」側へ変動する傾向にある。
- 参画タイプごとの因子得点分布の傾向を見てみると、「活気度軸」、「親接度軸」、「整然度軸」の3軸において、変動の傾向に大きな違いは見られない。「静寂度軸」においては、実験への参画の度合いが高い方が、因子得点が「喧噪」側へ変動する傾向にある。

以上より、考察を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みは活気があり、整った、そして騒がしいイメージとなると言える。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、活気あるイメージ、整ったイメージ、喧噪のイメージが強くなると言える。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画しなかった場合の方が参画した場合に比べて、身近なイメージが強くなると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、街並みの活気、親近感、整然性のイメージの変化へは大きな影響を与えないと言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが影響を与えるイメージは、街並みの喧噪のイメージであると言える。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ積極的に参画するほど街並みの喧噪のイメージは強くなると言える。

5-4 まとめ

本章では、景観イメージに関するアンケート結果と「4-6 実験への参画度によるサンプルの分類」で分類を行った参画タイプを用いてプロフィール分析と因子分析を行い、サンプルの抱く街並みの景観イメージについて分析を行った。本章で得られたサンプルの抱く街並みの景観イメージの分析結果を以下にまとめる。

プロフィール分析による街並みの景観イメージの分析結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画した場合の方が、参画しなかった場合に比べ、華やかさ、明るさ、活気などといったイメージが強くなる。
- 街並みの新しさ、趣のイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とは関係なく、強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、景観イメージの変化に大きな影響を与えない。
- にぎやかな街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが低い方が大きく変動する。これは、参画の度合いが低いサンプルが、様々なものを飾り付けて積極的に「色彩参画」を行っているサンプルを見ることによって、街並みの賑わいを感じたためであると考えられる。

因子分析による街並みの景観イメージの分析結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みは活気があり、整った、そして騒がしいイメージとなる。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画した場合の方が参画しなかった場合に比べて、活気あるイメージ、整ったイメージ、喧噪のイメージが強くなる。
- 街並みのイメージは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画しなかった場合の方が参画した場合に比べて、身近なイメージが強くなる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いは、街並みの活気、親近感、整然性のイメージの変化へは大きな影響を与えない。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の度合いが影響を与えるイメージは、街並みの喧噪のイメージである。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ積極的に参画するほど街並みの喧噪のイメージは強くなる。

以下に、本章で得られた結果を基に考察を行う。

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、実験を行うことにより、街並みのイメージが活気あるイメージになることが示された。また、実験の感想として「華やかで活気のある街並みに見えました」や「いつもの高宮とちがって魅力を感じました」といった声が聞かれた。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行い、飾り付けられた街並みを見たことで、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたために街並みの「活気」のイメージが向上したと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は街並みの「活気」のイメージを向上させる効果があると考えられる。



図 5-13 「色彩参画」前後のイメージの変動

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、参画者の方が、街並みに活気あるイメージを感じる傾向が強いことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みの「活気」のイメージは大きく向上すると考えられる。また、因子分析の結果では参画者の方が、整ったイメージ、喧噪のイメージも強くなることが示されている。これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、街並みの景観を整え、街並みのにぎやかさを感じたためであると考えられる。

表 5-14 「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動

	参画者の変動		不参画者の変動
街並みの 活気イメージ	↑ up	>	↑ up

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がないことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無は、街並みの景観イメージの変化に影響を与えるが、参画の度合いは街並みの景観イメージの変化に大きな影響は与えないことがわかった。以上より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく、参画の有無であると考えられる。

表 5-15 「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動

	高参画者の変動		低参画者の変動
街並みの 活気のイメージ	 up	=	 up

脚注及び参考文献

¹⁾ 巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票 設問 A-2 , 事後アンケート調査票 設問 A-4)